

## 保冷剤

西曆九二〇年

八月十七日

ギヤングズ・オブ・信貴山

なにかが狂っている夜だった。

波は平静、風は西向かいの微風。二分ほど欠けた長潮の月はなお爛々と煌めき、五〇キロ先まで見渡せた。船腹を叩く波の音は心地よ  
いばかりで、船内にも異状らしい異状はない。

それでも、なにかがおかしかった。

かなり、大型の船である。排水量は六〇トンを超え、全長にして十  
八メートルばかり。尾鷲<sup>おわせひのき</sup>檣を外板に用いた一枚帆の和船は、伊勢の  
港を出立し伊良湖水道を抜け、現在は本州最南端・潮岬の東四十キロ  
ほどの海原を泳いでいた。日本近海、太平洋側を流れる巨大な潮流も  
ここでは風に劣り、遅滞なく母港の下津へ首尾は向かう。なにもおか  
しなところは無い。少なくとも、耳目で捉えられる範囲には。  
かのような違和感に苛まれていたのは、この船を預かる若き雇われ  
の船頭だった。

甲板から目を凝らせば本州島の稜線が見える。沿岸航法の目測を頼  
りに現在位置を割り出そうとするその視野が不意に暗がりに紛れた。

顎を上げると夜空には一幕の雲。ため息をひとつばかり吐いて諦めた  
船頭の、船内に戻るその背後に、いよいよ違和感は船へと近づきつつ  
あった。

燐光だ。

明瞭な光ではない。まるで朝霧を通して見る陽光のようにぼやけた  
青白い光のカタマリが、船に音もなく近づいてきて、接触し、這い上  
がり、甲板に立つ。

いつの間にか、あるいは最初からか。

光は人の姿をとっていた。少女の姿であった。

濡れた前髪越しに夜空を見上げて、薄く射し込む月明かりに目を細  
める。遮るように掲げた手から海水のしずくが垂れて、鼻の頭ではじ  
けて消えた。

「浪<sup>なみ</sup>の打つ 瀬見れば玉ぞ 乱れける

拾はば袖に はかなからむや」

かのように歌ってはみたが、彼女にその歌の意味は解っていない。  
ただ、無数に寄り集まって形を成している、彼女の一部分——この海で  
死んだ誰かの魂とかなんかそういう属性のものが、不意を衝き彼女の  
唇を動かしたのだった。

すなわち彼女は船幽霊である。

この船を沈めに来たのだ。

船幽霊はべたべたと、まるで風呂上りに体も拭かずに歩く子供のよ  
うに、ボタボタダラダラとだらしく海水をしたたらせ、ズリズリゴ  
リゴリと鑄鉄製の錨を引きずって甲板上を歩き、行き着いた船室のド  
アを、やおらヤクザキックで蹴破った。